

---

# 負物語

朝谷 紘人

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

負物語

### 【Nコード】

N7592Z

### 【作者名】

朝谷 紘人

### 【あらすじ】

“ 努力を知らない勝者なんか敗者より負けてるじゃないか ”

混沌よりも這い寄る過負荷、球磨川楔。

彼に勝利の味を教えた、

絶対的な勝利を手にする怪異とは！？

世界が変わったとき、＜物語＞は交錯する

これぞ現代の怪異！怪異！怪異！

青春は勝っても負けても君のもの。

## みそぎスパイダー 001

僕みたいな出来損ないが物語の語り部を務めるのは、僕なんかよりよっぽど主役を務めるにふさわしい勝ち組達から批判の声が飛んできそうなものである。

まあ巷じゃ僕みたいに嘘つきで弱々しい戯言遣いがシリーズ通して主役を務めたり僕みたいに主人公と敵対する悪役の詐欺師がメインヒロインを押し退けて語り部に成り上がったりとかいうこともあるらしいからこういう場があってもいいよね。

そう、この僕こと球磨川楔は少年漫画原作の物語の主役を務められるほど強くはないし、正しくもない。

僕には事実を無かったことには出来ても虚実をあったことには出来ない。

相手を弱くすることは出来ても相手より強くなることは出来ない。番外編の主人公にはなることはできても本編の主人公になることは出来ない。

僕には相手を打ち負かすことは出来ても勝つことは出来ない、勝つたことがない。

生まれた頃から僕はあらゆる勝負に負け続け、その度に勝ちたいという思いは強くなった。

勝つための努力は山ほどした。男の子たるもの一度は悪を挫くカッコいいヒーローに憧れるものだ。当然僕にもそのような時期はあった。

少年漫画の主人公のような、かつこよく、正しいヒーローになりたかったのだ。

でもどれだけ努力したところで僕は僕、負け組は負け組であり勝利を手にすることはどうやっても出来なかった。

そんなことはとつくの昔に分かっていたことじゃないか。

僕は勝者にはなれない。

そんなことは13年前、初めてあの絶対的な勝者に会った日から分かっていた。

だから僕はあらゆる勝者を潰してきた。

幸せそうにしている連中の笑顔を片っ端から潰してきたのだ。

何食わぬ顔で、格好つけて、括弧つけて。

そんな僕を止めたのもやっぱりめだかちゃん 絶対的な勝者だった。

彼女みたいに正しい人間だったら僕も本編で主人公になれたのかな？  
多分なれなかっただろう。

さあ、これはそんな僕が体験した本編でも番外編でもない、僕自身の物語。

勝者に一杯食わせる負け組の独り語り。

## みそぎスパイダー 002

その日、僕たちは普段のように学園内で繰り広げられる激闘の非日常ではなく、むしろめだちゃん率いる僕たち生徒会にとっては非日常よりも珍しい、いたって普通の日常的な時間を過ごし、いたって普通に放課後を迎えた。

僕はさつさと帰り支度をすませ、そのまま生徒会室へと向かった。

こんな僕でもこの箱庭学園の生徒会副会長である。

僕みたいなのが生徒会副会長なんかやってるなんて国を守る気がない人間が政治家をやってるような滑稽さがあるが、しかし僕が副会長という大役を務めているのにもちゃんとした理由がある。

それはクラスの皆からの熱い思いのこもった組織票により無理矢理選ばれたとかじゃんけんに負けて渋々立候補したからとかではなく、生徒会長黒神めだかに直々に指命を受けたからである。

僕は生徒会戦拳の末、めだちゃんに敗北した。本来ならそこでの学園を去るつもりだった僕をあの娘は生徒会、それも副会長に任命したのであった。

まったく、つくづくおかしな娘だよね。

そういつたいきさつがあつて副会長になつたわけだが、今となつては生徒会役員のみならずとも仲良くやっていつてるつもりだ。

庶務の人吉善吉こと善吉ちゃんめだちゃんの幼なじみだ。

本人はめだちゃんを守る気で見たいけどなんといいっても彼は良くも悪くも“普通”、はたから見れば彼みたいなのがめだかち

やんみたいな怪物を守る意味も意義もない。

だけど彼じゃなければめだかちゃんと並び立つことは出来ない、彼には普通ながらそう思わせるような素質があると安心院さんは踏んでいるみたいだ。

そして書記の高貴ちゃん 阿久根高貴は中学時代、破壊臣としてその名を轟かせていた。当時生徒会長であつた僕（この辺りについては完全なイカサマなのであまり言及しないで欲しいな）の下で生徒会庶務として働く一方、破壊活動に勤しんでいた。そんな彼もやはりめだかちゃんに出会い、彼女に恋をしたことで変わった。その後柔道部に入り鍋島猫美の指導を受けたことで破壊臣の面影はなくなってしまった。

そして最後に会計の

「うーん……もうちょっとで届くんだけどなあ……」

会計の喜界島さんが教室から生徒会室の間にある廊下の自販機の底に手をつ突っ込んで手探りで何かを探していた。

喜界島もがな 水泳部から生徒会に1日320円で雇われているお金にうるさい少女。

金さえ払えばどんなに危険で、過酷で下衆な仕事でも引き受けそうなものだ。

『やあ、どうしたの？喜界島さん。』

「あ、みそぎちゃん！ええと……実は自販機の下にお金を落としちゃったの……それより今何か凄く失礼な紹介された気がするんだけど……」

……気付かれていたらしい。

いくら過負荷の僕とはいえ、ここで反省しないわけではない。  
どれここは男らしく、120円までなら奢ってやろう。

『とりあえず、いくら落としたの』

「10円」

……安っ！

そんな額のために女の子が地べたに這いつくばって埃まみれになりながら自販機の底に手をつ込んでいたかと思うと泣けてくるぜ。  
さすがの僕でもそこまではしない。

僕が“混沌よりも這い寄る過負荷”ならばさしずめこの娘は“10円求め這いつくばる会計”といったところだろう。

「ねえ……みそぎちゃん、さっきから私のことバカにしてない？」

『ん？ああゴメンゴメン、喜界島さんの裸エプロン姿を想像してたんだ』

「どっちにしてもあんまり嬉しくはないね……」

『良いものを見た気分になったよ。お礼にジュースを奢ってあげる。』

当然それは建前であり、本当は地べたに這いつくばる彼女が可哀想だったからだ。

僕は可哀想な娘が大好きなんだ。

「本当に！いいの？みそぎちゃん？やったー！」



この娘、ジュース一本でいくらなんでも喜び過ぎである。  
ここまで喜ばれるとあまのじゃくな僕としては、逆に奢りたくなくなってくる。

『ああ、構わないよ。』

まあ、そうひねくれていても仕方ないので、僕は自販機に300円、僕と喜界島さんでそれぞれ150円ずつ、投入口に入れてボタンを2つ押した。

選んだのはコーラを2つ、のはずだったが……

「……コーヒー？」

1つ目にはコーラが出てきたのだが、2つ目に出てきたのは喜界島さんの言う通り、砂糖不使用のブラックコーヒーだった。

僕は確かにコーラのボタンを二回押したはずなのでコーヒーが出てきたのは自販機の故障か何かだろう。

『喜界島さん、コーヒーは好き？』

「あんまり好きじゃないかな……」

『じゃあコーヒーは僕が飲むよ。僕はこう見えて3度の飯よりコーヒーが好きなんだぜ。』

「でもみそぎちゃん、コーラ選んだよね？ひょっとしてコーラが好きなんじゃないの？」

バレてしまった。

実は僕は3度の飯も食べられなくなるほどに苦いものが嫌いだ。

ましてや砂糖の入っていないコーヒーなんて飲めるはずもない。  
このコーヒーも生徒会室に持って行って砂糖をたっぷり入れて飲む  
つもりだった。

僕がその旨を伝えようと喋り出す前に喜界島さんは

「あ、そうだ！」

と何かを閃いたようだ。

「じゃんけんで決めようよ！」

じゃんけんか。

名案のつもりなんだろうが何を隠そうこの僕、球磨川楔は勝ったこ  
とがない。

それはじゃんけんも例外ではなく、ものの見事に勝率は0である。

「いくよー！じゃん、けん、」

そんな目に見えている勝負なんてする意味がないだろうというのが  
実際のところだが、そのようなことを彼女に言ったところで仕方が  
ない。

ここは……グーだ。

「ポンッ！」

そこで彼女がパーを出して僕の負け……そのはずだったが彼女がそ  
の時出した手はチョキの形を示していた。

「あーあ、負けちゃった……じゃあこのコーヒーいただくね。楔ち  
ゃんがせっかく奢ってくれたんだからたまにはブラックコーヒーも

いいかも」

なんていい娘なんだろう。

惚れちゃうじゃないか。

それに彼女、僕と違ってブラックコーヒー飲めるんだな……

いや、驚くべきところはそこではなく、今僕は確かに勝った。

じゃんけんとはいえ、人生で初めて勝利というものを手にした。

今まで負け続けてきた僕が、ここにきて初めて、勝利の味を知ったのだ。

これは一体どういうことだろう……

このときの僕にはここでの初勝利がどういった意味を持つのか知るよしもなかった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7592z/>

---

負物語

2011年12月31日18時14分発行